

勉強は部活である②

●「勉強は部活である」の続き。前号で、「週に二、三回勉強する＝頭の体操レベルの勉強」で大学に合格できると錯覚している人がいることを述べた。高校受験でも同じような人がたくさんいる。勿論本人は悩んでいる。親も心配し、何とかならないかとあの手この手をくり出してみよう。しかし、うまくいかない。

●その原因の一つは、勉強は目に見えないということである。スポーツをやっているならば、その種目で上手い人というのは見えてすぐ分かる。ところが、勉強は分からない。頭の中で行われる秘密の行為なのである。誰にも見えない。それでも受験生になれば、頑張ろうと思う。そして自分なりに頑張るのである。

●月曜日に、英語を一時間半。火曜日は社会を一時間。水曜日に漢字を一時間。木曜日は国語を二時間。全くやらなかった頃の事を考えればやっているのだからある。本人は頑張り始めたのである。頭の体操を！そしてそして思っている。何とかなるかもしれない。このままやれば伸びるはずだ。幻想である。錯覚である。

●さて、私達の役目は、一つには、そういう幻想や錯覚を、その生徒の成長具合に合わせて取り除いてあげることである。(勿論、信頼関係が築けていることが前提であって、日常接するこ



とのない保護者の方の錯覚や幻想には無力のことも多い。)

●また、私達の仕事の一つは、これまたその生徒の成長具合に合わせて、勉強でも「競技者」となるよう、かけひきをしながら導くことである。そして、微妙だがしかし確実な快さを一人でも多くの子供に味わわせることであると銘じている。



●当然のことながら、基礎体力、潜在的な運動能力には個人差がある。どんなスポーツでも、それほど練習しなくても器用にこなす人がいる。同じように、基礎的な学習面での能力にも個人差は大きい。一回やれば、中学レベルのことは大丈夫という人は、クラスに一人位はいるものだし、創学舎大学受験部でも何年か一人二人はいる。しかしながら、大半の人にとって、スポーツでも勉強でも何も考えずに反復すれば済むほど単純なものはない。部活で、先輩のアドバイスも聞こうとせず、いやそうにダラダラ練習している人が、恐らく上達することがないのと同様に、勉強でも一定の規律を自分に課すことが出来ない人は上達しない。部活も出ていれば上達するというのはウソ。勉強も塾に通っていれば上達するというのはウソ。自分が、自分の子どもがどういう関り方をしているのか、見つけてみる必要がある。(小林(健))

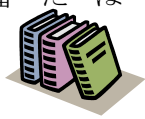
バースデイ・ガール

●本年度より教科書が改訂された。私の関心事の一つは、昨年度まで、中三の国語の教科書に所収されていた村上春樹の短編が、新版にも採用されているかどうかであった。

●結果的には、今回も採用されていた。ノーベル文学賞に最も近い日本人と評される彼の、その独特な文体と世界観に中学生の段階で触れることができるのは、非常に幸運なことではないだろうか。

●ただし、この『バースデイ・ガール』という短編は、残念ながら、村上春樹の魅力を十分に伝えているとは言いがたい。しかし、それも無理からぬことなのだ。村上春樹を公の場で中学生に読ませるにはいくらかの制約が存在する。

●まず、ある程度の読解力が要求される。寓話的で、象徴的で、示唆的で、暗示的で、婉曲的な文脈や修辞は、彼の文体の大きな魅力だが、それゆえにコミックやアニメのストレイトな表現に慣れている世代には、何が言いたいのかさっぱりわからないだろう。また、必然性があるとはいえず、性的描写が多いこともネックである。『バースデイ・ガール』はそうした制約を超えた稀有な一編だったのだろう。数次にわたる厳密な審査を突破した宇宙飛行士みたいだ。



●しかし、彼の文体の別の柱である、比喩表現の多彩さとの確さについては、他の文学と大きく違うことに子供たちも気付くだろう。それは、新鮮な感動を与えるはずだ。夏の松林を抜けて、広大な浜辺に遭遇したときのように。私が村上春樹を体験したのは『ノルウェイの森』が最初だったが、「空気」や「感覚」という非言語要素が、言語によってあまりに見事に描写されているので驚いたことをよく覚えていて。そして、この作品は、終始ある種の「ほの暗い」色調を連想させた。まるで濃いグレイのインクを使っ

た活字で書かれているかのように。小説を読んだ時、私は村上龍の文学に夢中だったが、龍の文体が持つ「暴力性と疾走感」とは、まるで対極の存在だった。

●公立高校入試に特色化選抜が存在した頃、彼のデビュー作を引用した学校があった。引用されたのはこんな場面だ。「犬の漫才師」と揶揄されるほどに軽薄さを売りにしたラジオDJがいる。そんな彼が、ある日の番組の冒頭、難病のため寝たきりのまま病室から一步も出ることができない少女からの葉書を紹介したあと、いっになく真面目な口調で心情を吐露し始める。「僕がこの手紙を受け取ったのは昨日の三時過ぎだった。僕は局の喫茶店でコーヒーを飲みながらこれを読んで、夕方仕事が終わると港まで歩き、山の方を眺めてみたんだ。君の病室から港が見えるんなら、港から君の病室も見える筈だものね。山の方には実にたくさん灯りが見えた。もちろんどの灯りが君の病室のものなのかはわからない。あるものは貧しい家の灯りだし、あるものは大きな屋敷の灯りだ。あるものはホテルのだし、学校のもあれば、会社のもある。実にいろんな人がそれぞれに生きてきたんだ、と僕は思った。そんな風に感じたのは初めてだった。そう思うとね、急に涙が出てきた。泣いたのは本当に久しぶりだった。でもね、いいかい、君に同情して泣いたわけじゃないんだ。僕の言いたいのはこういうことなんだ。一度しか言わないからよく聞いておいてくれよ。

僕は、君たちが、好きだ。

あと十年も経って、この番組や僕のかけたレ

コードや、そして僕のことをまだ覚えていてくれたら、僕のいま言ったことも思い出してくれ。彼女のリンクエラストをかける。エルヴィス・プレスリーの「グッド・ラック・チャーム」。この曲が終わったらあと一時間五十分、またいつもみたいな犬の漫才師に戻る。御清聴ありがとう。」

こんな文章を出されたら、人生の考察を始めてしまい、試験どころではなくなってしまうかも知れない。

●長編が多い彼だが、「まず何を読めばいいか」と訊かれれば、迷うことなく、『かえるくん、東京を救う』という短編を推薦する。ある日、片桐という主人公が帰宅すると、部屋には巨大なかえるくんが待っていた。かえるくんによれば、東京の地下に棲む巨大な(山手線ほどもある)みみずくんが近々大地震を起こす、それを防ぐためにやってきたのだと言う。ついては、ある理由から片桐の助力がほしい、ということだった。人々が変わらぬ明日を疑わない中で、片桐とかえるくんだけの孤独で必死の闘いが始まる。結末はあまりに切ない。一連の出来事を人々は片桐の妄想だと片付けるが、とすれば、我々が妄想と片付けている事象にも、真実が存在するのではないのか？



●遅ればせながら、近著の「1Q84」を読んだ。物語では、現実世界と隔たったパラレルな世界の記号として、「二つの月」が登場する。私が第二巻の終わりを読んでいた五月初旬の現実世界の空には、スーパームーン(地球に接近し輝度が増した満月)が浮かんでいた。彼の文学は、象徴的で、示唆的で、暗示的である。

【追記】現在『坂道のアポロン』というアニメが深夜枠で放送されています。一九六〇年ジャズに魅了される高校生の物語ですが(原作はコミック)、舞台が長崎県佐世保市で、全編佐世保弁という大変珍しい作品です。九州や長崎にゆかりがある方は是非ご覧ください(故郷の宣伝をさせていただきます)。(関)

言葉と姿勢とエクリチュール

●一人称「ボク」を使い続けてきた少年が、ある日「オレ」に変更する。革命的なことである。「ボク」らしかったTシャツや半ズボンを、「オレ」にふさわしいデザインのものに移行したくなる。行動様式も「オレ」にフィットするもの

に上書きしたくなる。言葉を変えることで、かつての「ボク」からの脱皮は加速し、「オレ」に似合うイケてるものを日夜研究することになる。●(人間が言葉を作り出したのだが)このように、言葉が我々人間にかなりの作用を与えることがある。言葉が人間を作る。

●言葉の影響力、言葉の作用、言葉の機能をジャック・デリダやロラン・バルトらはエクリチュールと呼んだ。例えば、甲子園常連校の野球部員の言葉の運用と幼稚園児たちのそれは同じではない。どこかのお料理クラブでの言葉の運用と常勝柔道部のそれが同じであるはずがない(と思う)。野球部には野球部のエクリチュールが、お料理クラブにはお料理クラブのエクリチュールがある(らしい)。出典:『寝ながら学べる構造主義』(内田樹)

●内田氏は、この作用を「投獄されるようなもの」と表現する。「我々にできるのは選ぶことだけ。選んだらその後はその言葉に支配される」と。

●言葉の運用に限らず、人間が作り出したものに、その人間の方が支配されてしまう例は少なくない。パソコンを導入して、その有用性・おもしろさに慣れたあと、はたしてそれ無しの生活に戻るだろうか。ゲームは？マンガは？オーディオ機器は？自分が選び、自分が所有した「モノ」の方に主導権を握られ、「選択者」「所有者」のはずの自分が支配され、振り回されていることは珍しくないだろう。

●有形無形問わず、自分で選んだものに自分が支配されているケースは他にもある。

●授業中の姿勢もその一つ。椅子の背もたれにふんぞり返っているようでは、遠くに見える問題を薄目を開けて「解いているつもり」になっているだけ。全く本気になれていない。「いや、オレ、こんな姿勢だけかなり本気つすよ。」という言葉も空しく響く。問題を本気で解いているときは両手が三角形を作り、上体は前傾姿勢になる。



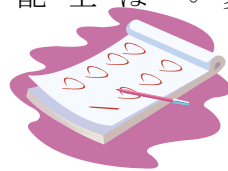
●どちらの姿勢にするかは自分で選べる。もちろん良い影響のある方を選んでほしい。良い影響に支配されているほうが効果性が高いのだから(意思の力でその尻を動かすのだ！前か？後ろに引くのか？悩むな！)。

●言葉がその選択者・所有者の人間性の形成にじわじわ影響を与えるように、得点力の形成に

じわじわと影響を与えているものは姿勢以外にもまだまだある。だから我々は授業でこうさなのだ。(五日市)

Vもぎの英語は55点。入試で100点

●実話である。Aくんは、英語が苦手だった。学校の定期テストはとれるのだがVもぎがどうしてもとれない。いつも時間が足りない。考えても考えても分らないことが多い。三分の一はカンで答を書く。そんな状態で、最後のVもぎは55点。他の教科はまずまず仕上がっているのに、英語だけが心配の種だった。



●さて、当日。びっくりすることがあった。Aくんはある人からアドバイスを受けた。「いいか、英語は全て訳せ。」無理だと思った。「そんなことをしたら絶対時間が足りません。いつも終わらなくて苦しんでいるんです。」「いや、訳せ。訳せば時間は余る。そして点は伸びる。」その人の勢いにのまれ、Aくんはかけてみた。奇跡が起きた。十分余り。満点。Aくんは、自分が今まで、英語の文字だけを見て解いていたことを知った。Aくんが本番で訳せたのには理由がある。教科書だけは何回も音読し、訳し、暗唱していたからだ。暗唱の効果は絶大！そして訳すこととの効果も絶大！Aくんは、高校に入って英語に目ざめた。(小林(健))

▼▲継続希望の方へ▲▼

▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。

▶在籍していた教室までご連絡下さい。